令和五年度入学者選抜学力検査追試験問題

国　語

（配　点）

1	2	3
30点	40点	30点

（注意事項）

1　問題冊子は指示があるまで開かないこと。

2　問題冊子は一ページから十七ページまである。検査開始の合図のあとで確かめること。

3　検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。

4　解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。

5　解答には、必ず**ＨＢの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりにマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。

6　一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。

7　解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

1

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

万葉集(注1)は、非現実的、不合理な発想に満ち満ちた歌集である。擬人表現についても、a鶯が散る花を惜しんでさえずり、鹿が妻を呼んで鳴くとするようなありふれたものだけではなく、命すらなく、むろん心のあるはずもないさまざまな物を、あたかも心ある人のように描くことを万葉の人たちは好んだ。「(1)心なきものにも、心あらする」ことは、以下の多くの例のように、万葉集の表現のいちじるしい特色だったのである。

中大兄皇子（のちの天智天皇）の次の古歌は、

中大兄の三山の歌一首

香具山は　畝傍を惜しと　耳梨と　相争ひき……うつせみも　妻を　争ふらしき（巻一・一三）

と、大和の三つの山（香具山、畝傍山、耳梨山）が、人と同じように恋愛し、妻を奪いあったとする。

また、巻七には海の波を擬人化する作がある。

大き海の水底とよみ立つ波の寄せむと思へる磯のさやけさ（巻七・一二〇一）

わき立つ「波」に心があって、b清らかな磯に寄せてゆこうと思っていると言うのである。

万葉集には「柿本朝臣人麻呂の歌集」の作として三百六十余首の歌が採られているが、それらには人麻呂自身の作歌も、彼が集めた歌も含まれると①スイ測される。次はそのうちの二首。

木に寄せき

天雲のたなびく山の隠りたる我が下心木の葉知るらむ（巻七・一三〇四）

(注2)舎人皇子に　献りし歌二首（その二）

春山は散り過ぎぬとも三輪山はいまだ含めり君待ちかてに（巻九・一六八四）

「天雲の」の歌は、たなびく雲で隠される山のように秘め隠された我が思いも、木の葉はそれを知るだろうと、また、「春山は」は、春の山は花を散らしても、三輪山だけはあなたのお越しを莟のままで待っていますと詠うのである。

巻十の秋の雑歌には、萩を擬人化する歌が少なくないが、その一首を引こう。

秋萩は雁に逢はじと言へればか声を聞きては花に散りぬる（巻十・二一二六）

雁に顔を合わせたくないとでも言うのか、秋萩は、雁の声が聞えると、花を開いたまま散ってしまうと、あたかも萩が人の心をもつように表現するのである。

また同じ巻の同じ部立(注3)には、露を擬人化する面白い歌がある。

秋田刈る苫手動くなり白露し置く穂田なしと告げに来ぬらし（巻十・二一七六）

稲刈りの終わった田小屋(注4)の覆いが動くのを、白露が、いつもの稲穂がなくなってしまったよと告げに来たものと見なす。私はどこに身を置けばいいのでしょうと、(2)露が愁訴に来たと表現する奇想の作である。

巻十二の相聞（恋の歌）には紐を擬人化する作がある。

針はあれど妹しなければ付けめやと我を悩まし絶ゆる紐の緒（巻十二・二九八二）

ちぎれてしまった衣の紐を手にして、針はあっても奥さんがいないからお前には付けられまいと、私を困らせるように切れてしまうこの紐の緒よと、衣の紐の②意ジ悪を怨むのである。旅先の男の歌であろう。

さらに c滑稽な表現としては、巻十六には「恋」を擬人化する歌がある。

穂積親王(注5)の御歌一首

家にありし櫃に鏁刺し蔵めてし恋の奴がつかみかかりて（巻十六・三八一六）

この歌の左注には、穂積皇子が宴会の酒に酔ってはいつも口ずさみ楽しんだ歌だと記す。錠前付きの箱に閉じこめておいた恋のやつめがいきなりつかみかかってきたわいと、恋に落ちたことを、戯れにこう詠うのである。

このように万葉集の人々は、心のあるはずのない山や波や葉や花や露や紐、はては恋という③抽ショウ概念までに人の心をあたえ、それらを人と同じように描く。(3)非現実的、不合理きわまりない擬人表現をほしいままにしていたのである。

そのような擬人の表現は、古代中国の詩にはまれなものであった。小川環樹(注6)「自然は人間に好意をもつか――宋詩の擬人法」は、近世の宋代の詩にひろく見られるようになった擬人表現を考察する前提として、古代詩の擬人法をおよそ次のように概観する。

《『詩経』(注7)には、「籜や籜や、風其れ女を吹かん（枯れ葉よ枯れ葉よ、風がお前に吹きつけるように）」と、枯れ葉に呼びかける形の擬人表現などがわずかに見られるほかは、「擬人法を用いた例はきわめて少ない」。それが「魏・晋以後つまり三、四世紀の詩になるとやや目につき始め、五、六世紀の南朝の詩には相当多くなり、唐代（七―九世紀）ではますます多く見られ……『鳥歌い』『花笑う』などの言い方は南朝から唐代へかけての流行であった」。擬人表現のその時代的変遷は、古代の中国人が自然にいだいた恐怖心がしだいに薄らいで、自然への親密感が増大していった④カ程と見ることができる。》

もしも、(4)古代以来の中国詩の擬人法の変遷がこのように説明できるものなら、いっぽうの万葉集の人たちの愛好した擬人表現は、逆に、古代の日本人が自然に対して深い親密感をいだき、人と自然との間に d大きな隔たりを見なかったことの現れと言えるだろう。山どうしが恋愛し、波や葉や花や露など

が心をもつとする擬人は、「草木咸に能く言語有り」（日本書紀・神代下）と伝え、また、あざむいた和邇に皮をはがれた稲羽の白兎が大穴牟遅神に助けられたという有名な話（古事記）もあるように、自然を恐れつつもそれと交感し、鳥もけものも草も木も、神も人もたがいにわけへだてなく交わり親しみあうように想像してきた(5)古代日本人の心性の表現だったことになるであろう。

（大谷雅夫『万葉集に出会う』による）

（注1）万葉集＝現存する日本最古の和歌集。　（注2）舎人皇子＝天武天皇の皇子。　（注3）部立＝作品の内容による分類のこと。
（注4）田小屋＝田の番をするための小屋。　（注5）穂積親王＝天武天皇の皇子。　（注6）小川環樹＝一九一〇～一九九三。中国文学研究者。
（注7）詩経＝中国最古の詩集。儒教の経典とされる五経の一つ。

問1　本文中の、①スイ測、②意ジ悪、③抽ショウ、④カ程　のカタカナ部分の漢字表記として最も適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。

①スイ測　ア 垂　イ 遂　ウ 推　エ 粋
②意ジ悪　ア 示　イ 地　ウ 持　エ 治
③抽ショウ　ア 証　イ 象　ウ 生　エ 照
④カ程　ア 仮　イ 科　ウ 課　エ 過

問2　本文中の、a さまざまな、b 清らかな、c 滑稽な、d 大きな　の中で、**他と異なる品詞のもの**を一つ選べ。

a　さまざまな　b　清らかな　c　滑稽な　d　大きな

問3　本文中に、(1)心なきものにも、心あらする　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　動植物のほか、ものごとや考えなどあらゆるものを、人と同じような恋心を持っているかのように捉えること。
イ　動植物だけではなく、すべての命あるものが、人と同じように感性を研ぎ澄ましているはずだと思うこと。
ウ　動植物のほか、ものごとや考えなどあらゆるものを、人と同じような心情を有しているかのように扱うこと。
エ　動植物だけではなく、すべての命あるものが、人と同じようにもともと知性を持っていると信じること。

問4　本文中に、(2)露が愁訴に来た　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　稲刈りが終わり、昨日まで宿っていた稲がなくなったので、自分の居場所を失った恨みを怒りと共に訴えようと白露がやって来たということ。
イ　稲刈りが終わり田小屋の覆いが動いてしまったので、自分の居場所がなくなった恨みを一切遠慮せず訴えようと白露がやって来たということ。
ウ　稲刈りが終わり、昨日まで宿っていた稲がなくなったので、自分の居場所がなくなったつらさを切々と訴えようと白露がやって来たということ。
エ　稲刈りが終わり田小屋の覆いが動いてしまったので、自分の居場所を失ったつらさを落ち着いて堂々と訴えようと白露がやって来たということ。

問5　本文中に、(3)非現実的、不合理きわまりない擬人表現をほしいままにしていた　とあるが、どういうことか。次の説明文の□を補うのに最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

〈説明文〉「**動植物や、山、波、紐といった目に見える存在だけでなく、恋などの概念までも、□。**」

ア　人間に憧れ人間同様の振る舞いをするものとして、歌の中で的確に表現していた

イ　まるで人間のように振る舞うものとして、歌の中で自在に表現していた

ウ　人間の能力を超えた振る舞いをするものとして、歌の中で自由に表現していた

エ　理想的な人間のように振る舞うものとして、歌の中で大胆に表現していた

問6　本文中に、(4)古代以来の中国詩の擬人法の変遷がこのように説明できる　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　古代には擬人法はほとんど見られないが、時代が下るにつれて擬人法が見られるようになったのは、古代の中国人が自然に対していだいた恐怖心が徐々に薄らぎ、自然への親しみが増していったからである。

イ　古代には擬人法はほとんど見られないが、三・四世紀ごろに擬人法が多く見られるようになったのは、古代の中国人が自然に親しむ感情を徐々に増しつつも、依然として神への恐怖心を持ち続けたからである。

ウ　古代には擬人法はほとんど見られないが、唐の時代以降に見られるようになったのは、古代の中国人が神に対していだいた恐怖心が自然と消えていき、同時に自然への親しみの感情が増していったからである。

エ　古代には擬人法はほとんど見られないが、時代の流れとともに擬人法が多く見られるようになったのは、古代の中国人が自然により親しむようになりつつも、自然への恐怖心は根強く残り続けたからである。

問7　本文中に、(5)古代日本人の心性　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　自然に対して恐れをいだく一方で、自然と人間との間に存在する隔たりがいつかは消えるものと信じる心のあり方。

イ　自然と人間の関係性は状況により変化するため、自然と人間との関わり方にそれほど積極性を持たない心のあり方。

ウ　自然に対して恐れをいだく一方で、自然への恐怖を徐々に克服していずれは自然を征服しようと努める心のあり方。

エ　自然を恐れながらも親近感をいだき、自然と人間とが互いに交わり関わりあうことに違和感を持たない心のあり方。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

わたしたち人間は、本当にロボットを信頼することができるのでしょうか？　そもそも、ロボットは信頼することができる存在なのでしょうか？

こうした疑問に直接取り組む前に、信頼とは何なのかを確認しておきましょう。多くの分野で信頼は研究されており、それぞれの分野でこれまでさまざまな信頼の定義が提案されてきました。残念ながら、これまで提案された信頼の定義はどれも［A］で、広く受け入れられている信頼の定義はまだありません。しかし、これまで提案された定義を確認することは、信頼にはどのような特徴があるのかを理解する役に立ちます。

［①］、工学でよく使われる機械の「信頼性」について考えてみましょう。この言葉は、ほぼ「機械のトラブル（不具合）が発生しにくく、正しく機能することが確からしい」ということを意味しています。つまり、設計段階での予測どおりに機械が問題なく行動することが確かであるほど、その機械の信頼性が高いということになります。同じような発想で、人間に対する信頼を工学的に定義すれば、(1)相手が予測どおり行動してくれる「確からしさ」が高いということになるかもしれません。

しかし、これをそのまま信頼の定義として採用することには問題があります。たとえば、自分の仲間を信頼することは、彼らが自分の予測どおりに行動してくれることが確かだということとは異なります。予想どおりに行動するかどうかわからないと仲間を信頼できないというのであれば、自分の知識や想像の及ばないような事柄については、仲間を信頼することができないということになってしまいます。

工学的な信頼の定義が不十分であり、「信頼＝予想どおりに行動してくれる確からしさ」とはいえないことを理解するためには、次の例も参考になるはずです。国家の安全保障には、他国が自国の不利益になるような行動をとりにくくすることが必要となります。しかし、これまで交流の少なかった国家がどのような行動を取るのかを予想することは、そもそも非常にむずかしいことです。こうした場合に、一方の国家が相手国を信頼しているという態度を明確に表明することがあります（これは「戦略的信頼」とよばれます）。［②］、信頼しているという態度を表明することにより、相手の国家はその態度に反した行動を取ることがむずかしくなるため、自国の不利益になるような行動を取りにくくなり、結果として自国の期待どおりに行動してくれる確からしさが高まるからです。人間どうしでも、相手が予想どおりに行動してくれる確からしさが低い場合に、(2)相手に信頼を向けてみることによって、確からしさを高めるということは起こります。

相手が何かをしてくれると信頼する場合、それをやってくれるという予測や期待がまったくなければ、そうした信頼はできないはずです。しかし、たとえば予測・期待どおりの行動をしてくれる確からしさが低くても、信頼は可能です。信頼の工学的定義の不十分さは、この点にあります。工学的定義を採用すれば、戦略的信頼は信頼ではないことになってしまいますし、信頼を表明することで、予測・期待どおりの行動の確からしさが高まることがあるということも説明できません。［③］、相手が自分の予想や期待どおり行動してくれる確からしさが高いという観点だけで信頼を考えると、何かが足

りないと言わざるをえないのです。ここではまず、確からしさが低くても、相手が自分のしてほしい行動をしてくれるという予測や期待を含むものとして、信頼を考えておきます。

信頼には相手の行動についての予測・期待が込められていますが、単なる予測や期待と信頼が異なるのは、信頼には、相手がなぜそのように行動してくれるのかという、相手の動機に対する観点が同時に含まれているからです。この見解は、特に哲学の信頼研究では熱心に論じられています。こうした見解の一つでは、信頼とは、相手が良心に基づいて自分の期待どおりに行動してくれるだろうというポジティブな楽観的感覚であると定義されます。(注1) この定義が先の工学的定義と大きく異なっているのは、相手が特定の行動をしてくれるという期待が込められているだけでなく、こちらが頼ればこたえてくれるような良心を相手がもっており、その良心にしたがって行動してくれるだろうという期待も込められているところです。この定義によれば、信頼とは、行動に対する期待と、その行動をする動機に対する期待という二種類の期待を含む態度なのです。

信頼と楽観的であることのあいだには重要な結びつきがあります。信頼のもつ重要な側面の一つとして、リスクの可能性を無視することで、自分の行動がしやすくなるという点があります。(注2) 先にあげた多くの学者が指摘しているのは実はこの点です。この世の中にリスクの可能性が０％であるようなものはほとんどありません。だからといって、誤作動した人工衛星が空から落ちてきて当たるのを心配したり、自分の家が設計ミスで床を踏んだとたん崩落してしまう可能性を考慮したりしていては何もできなくなってしまいます。(注3) こんな極端な例を除外したとしても、人為的なトラブルによるリスクの可能性を全部真剣に思い悩んでしまうと、飛行機や電車、車に乗るといったことさえできず、ふつうの社会生活は不可能になってしまいます。わたしたちは、こうしたリスクの可能性について楽観的に考えることで初めて生活していくことができるのです。(3) 信頼が社会生活の不可欠な要素だと考えられている理由の一つは、楽観的に考えることに結びついていることにあります。

残念ながら、単に楽観的であることと信頼していることは同じではありません。先に述べたように、信頼には、相手が自分の期待どおりの行動を取ってくれるという期待に加え、相手の動機への期待も含まれている必要があります。しかも、どんな動機でもよいというわけでもありません。また、単に相手の行動パターンを知っているだけでは、相手の動機をわかっていると言えません。相手が自分の期待どおりに行動してくれるのは相手の良心の結果であること、つまり、自分のことをある程度考慮した上で行動してくれると期待できることが信頼には必要なのです。信頼が社会生活の不可欠な要素だと考えられているもう一つの理由は、信頼は相手の良心への期待を前提にするため、わたしたちの社会が単純にお互いの利害関係だけで結びついているのではないことを説明できることです。

ただし、相手の良心を信じて楽観的になるだけでも信頼しているとは言えません。詐欺師は相手の良心を利用して、自分の思いどおりの反応をするだろうと考えているでしょう。この[4]詐欺師が、相手が思いどおりに行動しない可能性をまったく無視して、楽観的にかまえていたとしても、相手を信頼していることにはなりません。ある人が他の人を信頼しているかどうかは、相手が良心から期待どおりの行動をしてくれるとその人が考えるかどうか以外に、実際にそうしてくれた場合や、してくれなかった場合に、その人が相手にどういう反応を取るかも重要になります。

哲学の信頼研究でよく論じられる信頼のもう一つの特徴は、信頼が裏切りと感謝という感情に関係していることです。わたしたちは誰かを信頼しているとき、一〇〇％そうなる保証がないことはわかっていながらも、自分の期待どおりになるだろうと思っています。この信頼に含まれる期待は、単にそうなればいいなというものではなく、むしろ相手はそうしてくれるはずだという特別な期待なのです。なぜそう言えるかというと、信頼は、期待どおりにしてもらえなかったとき、独特の反応を引き起こすからです。つまり、裏切られたと感じてしまうのです。

この「特別な期待」が「期待どおりになる確からしさが高い」ということではない、という点には注意が必要です。信頼に相手の行動に対する期待が含まれていることはすでに述べましたが、自分の予測・期待どおりになる見込みが高いというだけの場合、その予測・期待がはずれた場合の反応は、信頼している場合とは異なります。前者はあくまで予測であり、期待どおりにならなかったとしても、予測がはずれてがっかりするぐらいの反応しか生じません。詐欺師は騙（だま）す相手が期待どおりの行動を取らない場合に、ややがっかりはするでしょうが、裏切られたとは感じないでしょう。また、あなたも普段からトラブルなく動いているハードディスク[注4]が故障したら、がっかりはするでしょうが、裏切られたとまでは感じないでしょう（感じるのならば、あなたはそのハードディスクを「信頼」しているのです）。

期待どおりになった際にも、[5]信頼と予測・期待の確からしさのあいだには感情の違いがあります。相手を信頼している場合、相手が自分の期待どおりの行動をしてくれれば、あなたは相手に感謝するはずです。一方、ふだん正常に機能しているハードディスクが、トラブルなく動いているとき、そのことに感謝するという人はあまりいません。なぜこのような反応の差があるのかといえば、やはり信頼には行動に対する期待以外に、相手が良心からしてくれるという期待が含まれているからです。利害関係を考えず良心から行われた行為には感謝の感情が生じますし、良心をもっているなら、自分のしてほしいことをわかってくれるはずだと思うからこそ、相手がそうしてくれなかったときには裏切られたという感情が生じるのです。

（上出寛子（かみでひろこ）他『今日、僕の家にロボットが来た。―未来に安心をもたらすロボット幸学との出会い―』による）

表１　信頼と予測・確からしさに対する感情の違い

	期待どおりだった	期待どおりでなかった
信頼	a	b
予測・期待の確からしさ	満足	c

（注1）ポジティブ＝積極的なさま。　（注2）リスク＝危険。　（注3）人為的＝人間の力が加わっているさま。
（注4）ハードディスク＝コンピューターなどのデータを記録する記憶装置の一種。

問1　空欄 ① 、 ② 、 ③ に入る語として適当なものを、それぞれ次の**ア**から**エ**までの中から選べ。**ただし、同じ記号は二回使わない。**

ア　したがって　**イ**　しかし　**ウ**　なぜなら　**エ**　たとえば

問2　本文中の、 A に当てはまる四字熟語として適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から選べ。

ア　一目瞭然　**イ**　一長一短　**ウ**　一石二鳥　**エ**　唯一無二

問3　本文中に、(1)相手が予測どおり行動してくれる「確からしさ」が高い　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　こちらが前もって予想したとおりに相手が動いてくれる見込みが大きい。
イ　相手が相手自身の考えで行動を開始する時期がこちらの想像どおりになる。
ウ　こちらの誘導に従って相手が行動するはずだと期待する度合いが高い。
エ　相手がこちらの行動を事前に予想して対応してくる可能性が増している。

問4　本文中に、(2)相手に信頼を向けてみることによって、確からしさを高める　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　「あなたは私を信頼しているか。」と問いかけることで、相手が自分に対して抱いている期待の強さを確かめつつ、相手の信頼を得たい意向を暗に伝える。
イ　「私はあなたを信頼している。」と伝えることで、その信頼に背く行動を相手が取りにくくして、自分が期待するとおりに相手が行動するように仕向ける。
ウ　「あなたは私の信頼に値するだろうか。」と尋ねることで、相手の自問自答を誘うと同時に、自分が相手と行動を共にすべきかどうかを慎重に判断する。
エ　「私はあなたを信頼しよう。」と宣言することで、こちらから相手に歩み寄る姿勢を見せつつ、相手の呼びかけにも応えようとする意思を示して親交を深める。

問5　本文中に、(3)信頼が社会生活の不可欠な要素だと考えられている理由の一つは、楽観的に考えることに結びついていることにあります。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　様々な分野の信頼性を高めることで、事件や事故に巻き込まれる可能性を低くして安全に生活することができる。

イ　様々な信頼の定義を考慮すれば、社会生活で起こりうる人為的なトラブルの発生を抑制できるかもしれない。

ウ　信頼がなければ、起こるかもしれない様々なリスクを予期して備えることが困難で、日常生活の支障が大きい。

エ　信頼することで、様々な危険を予期して余計な不安を感じることが少なくなり、安心して生活を送ることができる。

問6　本文中に、(4)詐欺師が、相手が思いどおりに行動しない可能性をまったく無視して、楽観的にかまえていたとしても、相手を信頼していることにはなりません。とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　詐欺師は、相手が自分の思いどおりの行動を取らなかったときに、相手に裏切られたと感じないから。

イ　詐欺師は、相手がそのうち自分の思いどおりに行動するはずだと考え、とくに焦ることはないから。

ウ　詐欺師は、自分の思いどおりの行動を相手が取ったからといって、とくに喜んだりはしないから。

エ　詐欺師は、自分の思いどおりの行動を相手が取らなかったときに、相手に失望してしまうから。

問7　本文中に、(5)信頼と予測・期待の確からしさのあいだには感情の違いがあります。とあるが、この感情の違いをすべて整理したものが**表1**である。**表1**の［a］、［b］、［c］に当てはまるものを、次の**ア**から**オ**までの中からそれぞれ一つ選べ。**ただし、同じ記号は二回使わない。**

ア　裏切り　　**イ**　満足　　**ウ**　落胆　　**エ**　感謝　　**オ**　信頼

問8　この文章の内容を説明した文として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　工学的な信頼の定義をそのまま人間の信頼に当てはめることはできないが、信頼を定義する上で重要となる感情の問題が工学的定義にも含まれており、軽視することはできない。

イ　信頼には、相手が良心的に行動することを期待して先にこちらから相手が取るべき行動の見本を示す戦略的信頼も含まれており、この期待が外れると人は裏切られたと感じる。

ウ　信頼とは、相手の行動に対する楽観的な期待と、相手の良心的な動機への期待の両方を含み、期待どおりに行動した際には相手に感謝するという心の動きを伴うものである。

エ　信頼は楽観的に考えることと深く結びついており、社会生活を安定した形で保つために必要不可欠なものであるが、その定義はまだ明確なもの

がなく、哲学的な議論が必要である。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

中学に進学した山口卓也は、担任の「泣き虫先生」や清田と出会う。同じく野球部に入り、何かと突っ張る清田に反感を抱く卓也だったが、キャプテンとして後輩につらく当たる英次と二人がけんかしたことで親しくなり、二人はバッテリー(注1)を組む。泣き虫先生に促され、班ノートを何とか書いて提出した二人だったが、それが立派な詩だとほめられクラスで披露される。2学期になり、クラスの結束を強める何かをしようという話が持ち上がる。

卓也は清田のことが気になって、そっと清田の方へ顔を向けると、手に顎をのせてつまらなそうに窓の外を眺めている。一人だけ笑いから外れている。いつもの清田だ。

笑いが収まると、クラスで一番頭のいい水野由紀子が手を挙げた。

「1年D組の歌はどうでしょうか。」

「1年D組の歌か。いいなあ。学校中どこのクラスも、クラスの歌を持っていないよな。みんな、いいアイデアだと思わないか?」

泣き虫先生が笑顔になった。

「でも先生、2年生になったら、1年D組の歌はどうなるんですか?」

大久保豊がまた、茶々を入れた。

「それはそれでいいんだ。今が大事なんだ。」

泣き虫先生が乗り気な上に、それ以外の反対意見は出なかったので、多数決で「1年D組の歌」を作ることに決まった。

「誰に作ってもらおうか。」

「ピアノが上手な斎藤美紀さんに作曲してもらったらどうでしょうか。」

頭のいい水野由紀子の提案に誰も異存はない。

斎藤美紀も最初は、「できない、できない。」と拒んでいたが、やっぱりピアノに自信があるらしく、みんなの拍手で引き受けた。

「じゃあ、作詞は誰にしてもらおうか。」

「山口君か、清田君がいいと思います。1学期の班ノートの詩が素晴らしかったです。」

水野由紀子がリーダーシップをとる。

「清田、どうだ？」
泣き虫先生が、外を眺めている清田に向かって声を掛けると、清田は立ち上がり、
「絶、対、に、イ、ヤ、です。」
と、力を込めてひと言、ひと言、区切りながら、大きな声で断った。
「そんな言い方はないだろ！」
泣き虫先生も声が大きくなり、「山口はどうだ。」と、(1)卓也に矛先を向けてきた。
「ぼくもイヤです。秋の大会に優勝したいので、作詞やっている時間ないです。」
モソモソと卓也も断る。
「清田も山口も、作詞するのは時間があるとか、ないの問題じゃないぞ！」
「とにかく、イヤなものはイヤです！」
「とにかく、清田がやれ。やるんだ。」
「イヤです。」
「イヤでもいいから清田がやれ。詩を書くことの大変さと野球の大変さ、詩を書く楽しさと野球の楽しさ、両方味わったほうが、人生にとっていいことなんだ。やるんだ！」
荒い口調で言いながら、泣き虫先生はやっぱり泣いている。
「それって、脅しですか。」
「脅しでもなんでもいいから、ともかく書け。清田しかいないんだ。」
クラス中がしーんとしている。卓也は、こんなにまでしてクラスの歌を作らなくてもいいのに、と思う。
「清田君にクラスの歌の作詞をしてもらいたい人、手を挙げてください。」
またしても、水野由紀子が立ち上がり、クラスの重い空気を破った。クラスのほとんどが、手を挙げた。卓也も挙げた。
「多数決で、作詞は清田君、作曲は斎藤さんに決まりました。清田君、斎藤さん、よろしくお願いします。」
クラスのみんなも、水野由紀子の言葉に続いて拍手をした。清田は「やる」とも「やらない」とも言わず、外の一点を見ている。
「水野さん、ありがとう。みんなで、1年D組の歌ができるのを楽しみに待ちましょう。」

やっと、2学期の初日が終わった。卓也は清田と一緒に野球の着替えに行こうと、最後に残った清田が席から立つのを待っていたら、泣き虫先生が教壇から下りて、つかつかと二人の所に歩いて来た。そして、文庫本を、卓也と清田にそれぞれ手渡すと、

「ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』という小説だ。1週間後の野球部の練習の後、3人で読書会をするから、読んでおくように。野球も楽しいけど、本を読むのも楽しいぞ。」

と言い捨てて、教室から出て行った。

卓也も清田も、一方的に強気で押しつけてくる泣き虫先生にあっけにとられ、何も言い返せず、二人は顔を見合わせた。

2学期の野球部のチームワークは、英次がいた頃よりもまとまってきた。卓也だけでなくチームの部員もみんな、英次のことなんか忘れて野球をやっている。不在の英次に代わって、清田が野球部のキャプテン的存在になってきている。清田の野球への熱の入れようもすごくてボールへの執着も強くなった。卓也の投げるボールも、ミットの一番いいところで捕るから、バシッといい音がする。

卓也も清田のミットの音に気持ちが良くなって、どんどん投げる。どんどん投げても、清田は素早くボールを投げ返してくる。ボールを捕るだけで精一杯だった清田が、卓也の胸目がけて、速いボールを返してくる。

清田のバッティングも良くなった。以前はバットをボールに当てにいっていたのが、思いっきりスイングするようになって、打球の速さが増してきた。それでも、卓也の方がまだバッティング技術は上だが、飛距離は清田の方が上だ。守備も良くなった。(注2)

ある日、2年生がバッティング練習をしている時に、キャッチャーフライが上がった。ボールがバックネットを越えたので、みんながそのボールの行方を目で追っていたら、清田だけが、バックネットを越えて行くボールを追いかけて走り出し、バックネット裏の何本かの木をよけながら走って、最後は、転びながらフライボールを見事にキャッチした。これには野球部全員がどよめいた。

卓也は、清田の何の躊躇(ちゅうちょ)もなくバックネット裏に回り込んで行く即断と、それに伴う足の速さにぶったまげた。それなのに、清田は捕ったボールを当たり前の顔で、卓也に返球すると、当たり前に大きく、「さあ、いこうぜ。」と、声を出した。

卓也はまるで漫画を見ている気分になった。このバックネット裏の捕球から、清田が今までと違って見えてきた。頼りがいのあるキャッチで、正真正銘のキャプテン(2)に見えた。

それは卓也だけでなく、1年生も2年生も3年生も同じだ。ここが間違いなく清田の存在が大きくなり、桜田中学野球部から英次が消えた瞬間だった。

秋の大会に向けて猛練習を続けていたある時、清田が卓也に、

「練習が終わった後、オレのアパートにちょっと寄ってくれないか。相談したいことがあるんだ。」と、言った。

卓也は、「清田がぼくに相談したいなんてないことだ。深刻な事だったらどうしよう。」と、気持ちがひるんだが、精一杯抑えた。

「ぼくに相談？　あのうまいインスタントラーメン食べさせてくれるんならいいよ。」

「ラーメンならいくらだって作ってやるよ。」

清田は、卓也の冗談めかした言い方が気に入らないらしく、憮然と応えた。

清田のアパートへ帰る道々、卓也は相談事が何なのか聞きたかったが、清田がひと言も口をきかないので、切り出せない。

清田はアパートの鍵を開け、玄関で靴下もストッキングも脱いで、ぬれ雑巾で足を拭いた。清田がゆすいだ雑巾を渡すから、卓也も足を拭いた。清田は意外にきっちりした奴だ。

アパートの部屋は相変わらず暑かった。窓を開け、扇風機を回すと、テーブルの上に置いてあったノートがパラパラとなびいた。

「山口、1年D組の詞を作ったんだけど、読んでみてくれないかな。」

「相談って、そのこと？」

「そうだよ。自分じゃいいのか、悪いのか、よく分からないんだ。」

テーブルの上のノートを清田が開いて、卓也に差し出す。

深刻な相談事でなく、卓也は、ホッとしたと同時に、清田の素直さに驚いた。清田が泣き虫先生の思い通りに、すんなりと作詞するとは思っていなかったからだ。それに、清田が弱音を言うのが意外だったし、自分を頼りにしてくれているのが、うれしかった。

開かれたノートには、丁寧な分かりやすい字で、詞がびっしり書いてあった。卓也は、正座して読む。(3)その脇で清田が、読んでいる卓也の顔を真剣に見ている。

卓也は、清田の強い視線に集中力が妨げられて、目が文字の上を泳いでしまう。それでなくても、詞なんて読んだことないから、いいか悪いか判断できない。

「清田、悪いけどさ、台所で読んでいい？」

「ああ、悪い。オレが台所に行ってるよ。」

卓也は大きく深呼吸して、ノートの文字だけに気持ちを集中させた。

(4) 「1年D組の歌」

春風吹いて　気持ちいい
そよそよ吹いて　気持ちいい
ぼくらは
がっこうにくると
みんなみんな　つくしんぼさん
1年D組つくしんぼさん

夏風吹いて　気持ちいい
かんかん吹いて　気持ちいい
ぼくらは
がっこうにくると
みんなみんな　ひまわりさん
1年D組ひまわりさん

秋風吹いて　気持ちいい
さらさら吹いて　気持ちいい
ぼくらは
がっこうにくると
みんなみんな　かきのきさん
1年D組かきのきさん

冬風吹いて　気持ちいい
ぴりぴり吹いて　気持ちいい
ぼくらは
がっこうにくると
1年D組ふゆりんごさん

みんなおはよう
泣き虫先生おはよう
今日も1年D組はじまりだ
みんなおはよう
泣き虫先生おはよう
今日も1年D組はじまりだ

卓也はいい詞だと思った。負けたと思った。
「清田にこんなやさしい詞が書けるんだ。」
「でも、甘っちょろいよな。ダメだったらダメって、はっきり言ってくれよ。」
「ダメなんかじゃないよ。いい詞だよ。」
「本当だな。」
「本当だよ。」

「泣き虫先生もクラスのみんなも、きっと気に入ると思うよ。」
「じゃあ、山口にラーメン作ってやるか！」
その日の清田の作ってくれたラーメンはうまかったが、(5)卓也には複雑なうまさだった。

（ねじめ正一『泣き虫先生』による）

（注1）バッテリー＝野球でピッチャーとキャッチャーのこと。　（注2）バックネット＝打球が飛んで行かないようにキャッチャーの後ろに張る網。

問1　本文中に、(1)卓也に矛先を向けてきた。とあるが、ここでの泣き虫先生の気持ちの説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　班ノートの詩がよくできていた清田と卓也に詩を書く楽しさや大変さをもっと味わってほしいと思っていたので、卓也に作詞を教えて清田と競わせることで優れた作品を作らせようという気持ち。

イ　班ノートの詩がよくできていた清田に詩を書く楽しさや大変さをもっと味わってほしいと思い、卓也だけに期待するかのように振る舞うことで清田の対抗心をあおって作詞させようという気持ち。

ウ　班ノートの詩がよくできていた清田と卓也に詩を書く楽しさや大変さをもっと味わってほしいと思っていたので、この機会に二人のうちのどちらかにはなんとしても作詞をさせようという気持ち。

エ　班ノートの詩がよくできていた清田に詩を書く楽しさや大変さをもっと味わってほしいと思い、作詞を引き受けたがらない清田に対して共同で作詞することを卓也から提案させようという気持ち。

問2　本文中の破線を引いた二つの段落「卓也も清田のミットの〜守備も良くなった。」の表現の特徴を説明したものとして最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　卓也と清田が熱心に日々の練習に打ち込む姿が、丁寧な心理描写を交えた臨場感にあふれる文章で表現されている。

イ　卓也と清田の練習風景や清田の成長ぶりが、同じような言葉のくり返しによる歯切れのよい文章で表現されている。

ウ　卓也と清田がライバル関係にあることが、競うように練習に励む二人を対照的に描く文章によって表現されている。

エ　卓也と清田のドラマティックな対立関係が、短い文を積み重ねていく緊迫感に満ちた文章によって表現されている。

問3　本文中に、(2)正真正銘のキャプテンに見えた。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　バックネット裏で鮮やかな捕球をした後も平然としている清田に、キャプテンと呼ぶにふさわしい頼もしさを感じたということ。

イ　バックネット裏までためらいなくボールを追いかけ捕球した清田に、自分こそキャプテンだと主張する姿勢を感じたということ。

ウ　バックネット裏での難しい捕球をやってのけた清田に、キャプテンなら当然身につけているはずの高い技術を感じたということ。

エ　バックネット裏までいちはやくボールを追いかけて見事に捕球した清田に、いかにもキャプテンらしい執念を感じたということ。

問4　本文中に、(3)その脇で清田が、読んでいる卓也の顔を真剣に見ている。とあるが、ここでの清田の心理の説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　自分で作った詞のできばえにかなりの自信を持っており、読んだ卓也がほめてくれることを確信している。

イ　自分では作った詞のよしあしはあまり気にしていないが、卓也が熱心に読んでくれることに感謝している。

ウ　自分で作った詞のできばえを意識するあまり、もし卓也にけなされたら二度と作詞しないと決意している。

エ　自分では作った詞のよしあしがよくわからないので、卓也の評価を正面から受け止めようと覚悟している。

問5　本文中の、(4)「1年D組の歌」の歌詞について話し合っている次の会話文の［A］、［B］、［C］に当てはまるものを、後の**ア**から**カ**までの中から一つずつ選べ。**ただし、同じ記号は二回使わない。**

生徒1　この詞は全体が五つの連でできているけど、第四連までに四季が季節順に割り当てられているよ。

生徒2　それぞれの季節の風が、季節のイメージに合った［A］で表現されているし、クラスのみんなを季節ごとに植物にたとえたのもかわいいね。

生徒3　第四連までの各連の最初の二行は、リズムが［B］で統一されているよ。

生徒2　最後の第五連は他の四つの連とちょっと違った形だけれど、それがかえって印象に残るね。

生徒1　この第五連で特に目立つのは［C］だね。詩や歌詞でよく使われるけど、これでこの歌もとても歌いやすそうになっているね。

生徒3　泣き虫先生を中心にクラスがよくまとまっている感じが伝わってくるし、今日も一日頑張ろうっていう気にもなるいい歌詞だよね。

ア　擬人法　**イ**　五七調　**ウ**　リフレイン（詩的反復）　**エ**　倒置法　**オ**　擬態語　**カ**　七五調

問6　本文中に、(5)卓也には複雑なうまさだった。とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　清田の詞を素直にいい詞だと評価する一方で、自分が作詞をしたとしてもこれほどの詞を作ることはできなかったと思うと、清田に対してかすかに悔しさのようなものを感じたから。

イ　清田の詞を素直にいい詞だと評価する一方で、清田がこのまま作詞の魅力に取りつかれて野球に対する情熱をなくしてしまうのではないかと思うと、不安のようなものを感じたから。

ウ　清田の詞を素直にいい詞だと評価する一方で、清田が作ったこのやさしい詞を1年D組の歌としてこれから毎日歌うことになるのかと思うと、恥ずかしさのようなものを感じたから。

エ　清田の詞を素直にいい詞だと評価する一方で、自分ならもっといい詞を作りクラスのみんなを感心させたのにと思うと、自分が作詞しなかったことに後悔のようなものを感じたから。

問7　本文から読み取れる清田に対する卓也の心情の説明として**適当ではないもの**を、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　卓也が清田と行動をともにする中で清田の新たな面をいろいろと発見して、意外な素直さと真面目さに驚いている。

イ　清田が自分に相談をもちかけ弱音を言ってくれたことに意外さを覚えると同時に、頼られてうれしいと感じている。

ウ　卓也が得意なことについて清田も高い能力を持っているのに気づいて、清田と自分を比べる意識を持ち始めている。

エ　清田が周囲に対して全く協調しようとしないことが気がかりで、何とかしてクラスに溶け込ませようと思っている。